

# アシュケナージとポリーニ

吉田 遼太郎

世の中にはライバルという名で互いに比較される人々がいる。相撲で言えば栃若、野球なら（かつての？）巨人と阪神、大学なら早稲田と慶応、F1ならプロストとセナ、といった具合である。

クラシック界ではフルトヴェングラーとトスカニーニを始め、フィッシャー＝ディースカウとプライ、ルビンシュタインとホロヴィッツなどが思い浮かぶ。最近ではやはりアシュケナージとポリーニの名がまず挙がるだろう。

大学時代にクラシック音楽鑑賞会の知り合いから面白い話を聞いたことがある。会のメンバーがアシュケナージ派とポリーニ派に分かれていつも論争をやっているんだそうだ。確

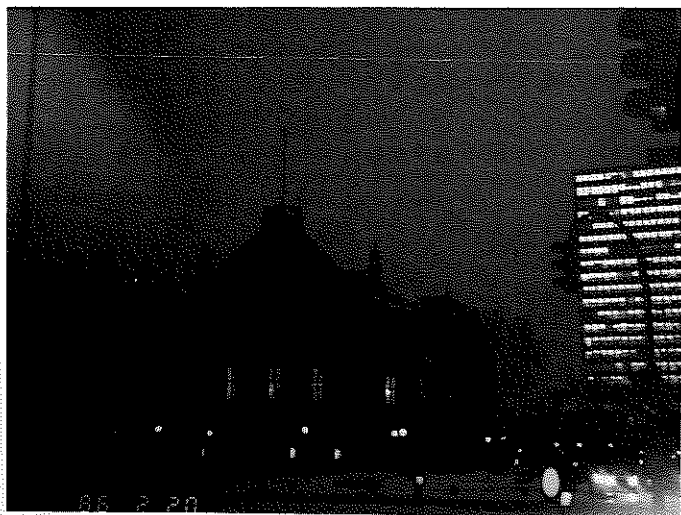
かに二人の音色、音楽性には明らかな違いがある。アシュケナージの音が下に向かって響くのに対し、ポリーニの音は上に響く。憂愁の色濃いアシュケナージに対し、あくまで楽天的なポリーニ。

私は二人の演奏をいずれも生で一回ずつしか聞いたことがない。あとは専らレコードかFMだが、いろいろ聞いた結果、私がどちらに与するかとなると、なかなか難しい。

アシュケナージを聞いたのは大学時代の日本公演だった。ベートーヴェンの2番とブラームスの1番の協奏曲を外山雄三+N響のバックで弾いた。実はその時の演奏はもうあまりよく覚えていない。ただ、レコードで聞いた音とは違っていたような気がする。CMで頭痛薬を水に入れると溶けながら沈んでいくシーンを見ることがあるが、アシュケナージの音が正にそんな感じで聞こえるのは録音技術のせいかも知れない。

ポリーニを聞いたのは、それから3、4年たった昭和61年2月、初めてヨーロッパ旅行した時のことだった。ハンブルクでポリーニのリサイタルがあることを知った私は、当日の昼に着くと大急ぎで荷物をユースホテルに置き、プレイガイドへ走った。雪が積もって歩きにくい上なかなかお目当てのプレイガイドが見つからず、苦労したが、何とか見つけた。きいてみたら1枚だけチケットがあるとのこと。もう買っただけで感激に身震いしてしまった。

●ハンブルク音楽堂





会場のハンブルグ音楽堂へ行ってみると当日券を求める人の長蛇の列。秘かに優越感に浸りつつ客席へ向かう。国会議員は当落が天と地の差だと言うが、こういう時はチケットの有無が運命の別れ道である。

ステージには奥にパイプ椅子が並べてあり、ポリーニ人気の凄さを想像させる。

この日のプログラムはベートーヴェンの葬送行進曲付ソナタ（作品26）、「告別」ソナタ、そしてシューベルトの変口長調（遺作）のソナタ。

ベートーヴェンの第1音からして一点の濁りのない美しい音が鳴る。フォルテは太陽のようにまぶしく、ピアノは冬空の満月のように冴え冴えと響く。

シューベルトのソナタになるとさらにロマンティシズムが加味されて、あの長大なソナタにぐんぐん引き込まれてゆく。特に第二章は一言一音に祈りをこめているようで、ポリーニの鳴らす音が消えていくたびに自分の身体が凝縮されてゆくような気分になる。

演奏が終わると盛大な拍手がいつ果てるもなく続く。みな立ち上がり、ステージ上の聴衆はステージを足で踏みならして彼を讃える。花束の列なんかできやしないが、一人一人が彼の演奏に満足し、感謝の気持を伝えているのがよくわかる。私のヨーロッパ旅行の

中でも忘れられない一夜となった。

その後も折に触れ二人の演奏をCDやFMで聞いてきたが、どちらの派に属するかやはり決めかねるのが正直なところだ。ブラームス、ラフマニノフなら断然アシュケナージだが、シューベルト、シューマンならポリーニの右に出る者はいない。ベートーヴェン、ショパンでは甲乙つけ難いものがある。特にショパンのエチュードでは聞くたびに軍配の上げる側が変わって本当に悩んでしまう。

ただ、残念なのは最近二人をライバル視する傾向が薄れていることである。ポリーニが毎年ザルツブルグ音楽祭でリサイタルをやるのに対し、アシュケナージは指揮活動に忙しくなってしまったからだ。気がつくといつ他の世界でもライバル関係を見つけにくくなっているような気がする。相撲の千代の富士のように一人舞台か、アイドル界のように群雄割拠、好みがバラバラになっている。それぞれが自分の判断で好き嫌いを決めるのはまことに結構なことだが、二派のいずれかに加わって常に相手と競うことにより自分も磨くだけでなく、一喜一憂が心に残り、相手への尊敬の念すら生まれるといった経験をしないのもつまらない気がする。母校のクラシック音楽鑑賞会は、今頃ブーニン派とキーシン派あたりに分かれているだろうか？（文部省勤務）